

特集

実践と結びついた 看護理論をつくる

状況特定理論をヒントに

大学生時代はもっぱら睡眠学習をしていた私は、理論は「絵にかいた餅」だと思っていた。また、日本における看護理論教育は「偉人伝」のようでもあり、昔の人々のアイディアが明日の実践に不可欠なものとも思えなかった。

2001年に兵庫県立看護大学(現兵庫県立大学)に赴任し、博士課程の研究に携わるようになり、私の看護学は一変する。理論構築と研究が看護学を推進する車の両輪であることがわかり、衝撃を受けた。学生時代の私は、理論は創るものであること、すなわち理論構築に方法があるということすら知らなかった。看護理論の学びを深めることで、看護現象の中に、キラキラ輝く看護独自の専門性が垣間見える瞬間に魅了された。そしてそれはいまも続いている。看護現象の中から看護のコア概念を抽出し、実践に還元したい! その思いで私たちは臨床看護研究支援センターをつくり、*Phenomena in Nursing*という機関誌を発行した。

在外研究で、Dr. Afaf I. Meleis(当時ペンシルベニア大学看護学部長)にお世話になり、2016年に本誌で特集を企画した際、Dr. Eun-Ok Imを紹介いただいた。それが機縁となり、Dr. Imから共同研究にお声掛けいただき、以来さまざまな対話を重ねてきた。その中で私たちは、理論を実践に活かすには、具体的な看護介入の内容を導けるレベルまで理論の抽象度を下げることが必要であり、Dr. ImとDr. Meleisが提唱する状況特定理論は、まさに今後展開していくべき形の理論だと考えていた。そして本年、Dr. Imに講演をお願いする機会を得た。時ははからずも2019年5月1日、まさに「令和」という新しい時代の幕開けであった。

今回の特集は2部からなる。第1部前半では、Dr. Imの了解を得て上記の講演を再編集し、後半は私たちの視点をまじえて解説する。加えて、状況特定理論が提案されてから約20年が経つが、その間にどのような理論が構築され、どのように看護の知の構築に貢献してきたのか、文献レビューをもとに概観する。第2部は、実践の現象を捉えるための1つの方略を紹介する。私は、理論構築のキモは、現象のコアとなる概念を捉えることだと考えている。もちろん、それはなかなか難しい。筆者の小野氏は自身の臨床、研究、研究指導の実践の中で、「できごとリフレクション」という方法を試行している。直接理論構築に結びつくものではないが、自身の実践を振り返り、対象者との相互作用の中で織り上げたタペストリーの意味を見いだそうとする方略である。これは実践、理論構築、研究のすべてに通じる道である。

私はこれまで「実践から看護理論をつくりたい」と述べてきたが、研究というプロセスが組み込まれなければ、実践から直接理論をつくることは難しいと実感している。本特集が、状況特定理論構築が進む契機になればと願う。

企画：坂下玲子(兵庫県立大学看護学部長・教授、同臨床研究支援センター長)